

# 革に命を刻む

今年10月、米子市在住の革工芸作家・本池秀夫さんが、文部科学大臣賞受賞の栄誉に輝いた。革工芸という独自の分野で、驚くほど緻密で感情豊かな作品を生み続け、後進育成への尽力や、美術館開設による地域振興が高く評価された形だ。

唯一無二の作家・本池さん、またその手が生み出す作品は、どのような魅力に満ちているのだろうか。



Profile 本池 秀夫さん Hideo Motoike

1951年、米子市生まれ。1971年20歳で革工房「アトリエMOTO」創業。1973年渡欧し、帰国後「革の人形」の制作を開始。1975年「ノーマン・ロックウェル展」への賛助出品を機に国内外の注目を集め、1980年からは制作拠点を米子市に移して作品づくりと後進育成に邁進。今年3月、大篠津町に「本池美術館」を開設した。2002年米子市文化奨励賞受賞、2016年革工芸の県無形文化財保持者認定。今年10月文部科学大臣賞受賞。

## 磁器人形との出会いが革に人生を懸けるきっかけに

本池秀夫さんは1951年、米子市に生まれた。渡米経験のある祖父は、20歳で東京の青山に革製品の工房「アトリエMOTO」を立ち上げ、商売が好調ななか突然ヨーロッパへ旅立つたりと、型破りだ。

ヨーロッパで本池さんは、ジュベ・カツベ作の磁器人形と出合った。冷たい磁器人形なのに血が通ったような温かみのある姿に衝撃を受けた。「革ならもっとおもしろいものができます。これを生涯の仕事にしようと思いました」

革の人形は、世界のどこにも作られていなかった。師匠も手本もなく、ただローマで見た磁器人形のイメージを頼りに手探りで革と向き合い、道具も自作して創作を続けた。大好きなアメリカのイラストレーター、ノーマン・ロックウェルが描く人物をよくモデルにした。

すると1975年、偶然が重なつて、東京で開催されたロックウェルの個展に賛助出品が叶う。作品は注目を集め、大きな飛躍のきっかけとなつた。

1980年から拠点を故郷・米子へ移し、以降40年以上、創作活動に取り組んでいる。革の人形は海外でも高く評価され、世界中から作品や

## 人形に命を与えるリアリティーの追求

人形は、木で原型を作り、革を被せて作り上げていく。髪・肌そして服、鞄などの小物もすべて革で作る。服の下に下着まで着せるリアリティーの追求が、人形に命を吹き込む。

本池さんはこれまで、「老人と子ども」をテーマに作品を発表してきた。「両者は過去と未来。年寄りが子どもに生き方を教えたり、年を取ると子どもに戻つたり。彼らが一緒に何かをしている場面には、物語が尽きないのです」。当初はいつか別のテーマに変わることと思っていたが、アイデアが絶えず、いまに至ると本池さんは明かす。

長く続けるなかで、作風にも変化が生まれた。「以前は老人の顔に皺を増やして年齢を表現していました。いつからか少しずつ抜けて、いまは皺が少なくても100歳に見えるのが理想です」。顔だけではなく、手にどう感情を持たせるかにも心を碎く。目に見える年代や喜怒哀楽より、内

側から漂う本質へと表現はますます深化している。

作品は、どれも他愛ない日常の一場面。まるで絵本を読むように人形たちの心情が流れ込み、セリフまで聞こえそうだ。ドールハウスや広場の人だからりを見けば、自分もその世界の一人になつたかのよう。「見る人がその時の気持ちで表情が変わって見えるような、そういう人形でありますね」と、本池さんは頗う。

もうひとつ、本池さんの代表作が「革の動物」だ。セピア一色で仕上げられているにもかかわらず、息づかいや体温さえ感じられるような動物たち。密林や草原など、彼らの周りに広がる風景まで見えそうになる。

## 自力で美術館を開館する革工芸に芸術としての光を

今年3月、米子市大篠津町に本池美術館を開設した。本池さんはこの施設に「自立した美術館」という志を抱いている。「運営資金を行政などよそに頼らず、自分たちだけの力で継続していくければ、つぶれないし迷惑もあまりかけずに済むでしょ」と話す脳裏には、一日置いていた公営の教育施設が閉館となつた無念がある。

「自分たちができる範囲で」と約3年半かけて建設した美術館は、外観、内装ともに本池さんがデザイン。土地の開墾から手がけ、自ら工具を持

つて大部分をDIYで仕上げた、集成の作品ともいいくべき建物となつた。アンティークの家具に建具、照明など、高い美意識を感じられる調度品も見所だ。

本池さんは、2016年に県の無形文化財保持者に指定され、さらに今年10月には芸術活動と後進育成、美術館開設の功績が地域文化振興に貢献したとして、国から文部科学大臣賞を贈られた。「私がどうよりもアート的な革工芸が一つのジャンルとして認められたのがうれしかった。革は先史から用いられながら、日本の伝統工芸に数えられていませんでした。自分が始めて50年続け、やつと形として認められたかな」と、本池さんは感慨を語る。

米子市が誇る希代の作家が半世紀かけて地位を確立した「革の芸術」の、今後の発展を願つてやまない。



上右)「絵本」:祖父と孫だろうか、古びた絵本を読み聞かせる老人と、ちょっと眠そうな子どもたち。傍らには犬がくつろぎ、暖炉の前を思わせるような、温かく優しいひとときだ。子どもの手は小さくすべすべで明るい肌。老人の手はやや浅黒くごつごつとして皺があり、腕にも血管が浮いている。このような細やかな表現は本池さんの真骨頂だ(2005年 牛革・金・銀 22×35×25cm) 上左)「広場シリーズ 公園」より。デート前のか花束を抱えて緊張気味の青年と、淡々と靴を磨く少年の対比がおもしろい(2013年牛革・銀 96×120×110cm)

「革の動物」シリーズ:2000年前後から作り始めた動物シリーズは、いずれもほぼ実物大。人形と同様に、豊かな情感が表れている



Information  
本池美術館 MOTOIKE MUSEUM  
米子市大篠津町4841 TEL.0859-25-0550  
<http://www.motostyle.jp> 水曜休館